氏　　名　中田英樹（なかた ひでき）
学位(専攻分野)　博　士（農　学）
学位記番号　農　博　第1314号
学位授与の日付　平成15年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　農学研究科生物資源経済学専攻
学位論文題目　ラテンアメリカ先住民社会への換金作物の浸透と地域変容
——グァテマラ山間部におけるマヤ系先住民共同体のコーヒー栽培を事例として——
論文調査委員　（主査）教授 祖田　修　教授 辻井　博　教授 野田公夫

論文内容の要旨

本論文は，中米グァテマラ共和国におけるマヤ系先住民村落，サン・ペドロ・ラ・ラグーナを事例として，コーヒー栽培が，村落社会の変容を伴いながら，導入されてきたプロセスとその意味について考察したものである。これまでの研究は，先住民社会を「トウモロコシをつくる伝統的社会」として見るか，あるいはコーヒー栽培を導入した場合には，「コーヒーをつくる近代化した社会」すなわち“伝統的なムラ社会→資本主義社会への移行”として見るかに分かれ，いわば研究の2極分化が起こっている。本論文は第3の方向をとり，コーヒー栽培の導入が，一方でマヤ系先住民社会としてのまとまりを維持しつつ資本主義化するという，地域固有の統一的な変容プロセスを遂げたことを提示する。

本論文は2部よりなり，第1部は理論編，第2部が事例編である。

第1部，第1章では，グァテマラ・コーヒー栽培の展開と，先住民共同体との関係に関する歴史学的研究を概括している。グァテマラ政府は，十九世紀末よりコーヒー栽培を普及すべく，平坦な南部に大規模プランテーションを確立した。そして，先住民を安価な労働力としてプランテーションに囲い込もうとした。しかし先住民は，多くが中西部に広がる山岳地帯に閉じこもり，季節労働者として労働力需要を満たしつつも，伝統的な生活様式を守り続けた。そこで先住民は，“共同体内部にコーヒー栽培を導入させない”という学的テーゼが，二十世紀半ばまでの時代について成立していたとする。

第2章では，二十世紀後半の先住民研究では次の2点が重要である。第1が内戦である。この期に軍や政府は，「無知ゆえに左翼ゲリラに洗脳された」として，マヤ系先住民虐殺を正当化した。政府—反政府という内戦の構造が，非先住民—先住民という人種主義的なそれと重なり，以降先住民問題が人種差別の問題として扱われるようになった。虐殺の告発，人種差別からの解放といったテーマが最重要視された。第2は，山間部におけるコーヒー零細栽培の普及の指摘は，近代経済学的な観点からの記述で留まり，コーヒーと先住民の歴史的展開は無視されているとする。

第3章では，トウモロコシの自給栽培に立脚した，伝統的共同体として先住民村落を捉えるウルフの論に対して，タックスは，確かに先住民社会は小規模で，近代的な技術も普及していないが，先住民の行動規範は，先進国での資本主義的なそれに他ならないと論じているが，この何れもが，対象を非歴史的超空間的に捉えるものと問題化した。

第4章では，以上を総括し，先住民を「トウモロコシの人間」か「コーヒーの人間」かのいずれかに還元するか，あるいは前者から後者への移行として還元してしまう先行研究の分析装置では，彼らを取り巻く今日の不平等な諸状況が捉えられないとする。

以上を踏まえての事例紹介が，第2部である。

第1章では，サン・ペドロの現在的状況を紹介している。コーヒー栽培の導入が，導入していない近隣村落との間に大きな違いをもたらした。高い教育普及率，近代的な建築様式，伝統衣装の衰退など，何れも伝統的なムラ社会が近代化した社会へと変化したと映る事実をとりあえず考察している。

第2章では，この変化を歴史的に辿り，確かにサン・ペドロではコーヒーが普及し大きな変化が起こったが，しかしそれ

が，外部から暴力的にムラ社会を解体したのではない。それはサン・ペドロ固有の地政学的諸条件，人口増加に伴う農地細分化・疲弊化，技術改良，交通環境の改善，内戦による村の孤立などと不可分に展開し，個性的な内容をはらんでいるとする。

第３章では，今日の村人のコーヒー栽培に関する行動原理について聞き取りを行い，確かに多くの村人は「儲けるため」と理由付けるが，この「儲かる」という経済人ホモ・エコノミクス的な規範の背後には，彼らが歴史的に形成してきた土地への思い入れや執着，つまり「土地への信頼」が潜んでいることを指摘し，単純に資本主義的な行動原理に還元できないことを解明している。

終章では，以上の事例から得られた諸見解を第１部の考察に接合する。その際，世界的にも有名なサン・ペドロ先住民素朴画を取り上げ，それを巡って画家と観光客との間で交わされる関係，つまり単に先住民の絵画として興味を示す観光客と，描かれた場所と描いた人にこだわる先住民とのギャップの中に象徴されるサン・ペドロの人々をめぐる近代と現代の相克が，なおマヤ研究の現実を物語るとしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，中米グァテマラ共和国のマヤ系先住民の村落サン・ペドロ・ラ・ラグーナについて，長期にわたり調査を重ね，その村がコーヒー栽培とどのように関わってきたか，またそれはどのような社会的・歴史的意義を持つのかについて明らかにしようとしたものである。

従来グァテマラのマヤ系先住民社会に関する研究は，単に「トウモロコシを栽培する伝統的社会」とするか，あるいはコーヒー栽培を導入した一部の地域については，「コーヒー栽培を行う近代化した社会」と見るかに二極分化し，現実を的確に捉えたものとはいえなかった。そこで本論文は第３の方向をとり，独自の視点からコーヒー栽培を導入した先住民地域社会の個性的な変容過程を明らかにしたものである。

評価すべき点は次の通りである。

第１に，約２年に及ぶ現地調査に基づき，その成果を極めて具体的かつ詳細に論述した。またこれまで日本では研究の少なかった地域の研究を手がけたものであり，地域研究の発展に新しい足跡を刻むものであると言える。

第２に，グァテマラのマヤ系先住民に関する研究史を詳細に検討し，その研究傾向が２極分化しつつあるものと判断し，その間隙に新たな研究方向を見出し，それを立証したものである。

第３に，マヤ系先住民のコーヒー栽培との関わりを，包括的な視野に収め，数少ないコーヒー栽培導入地域の村に焦点をあて，その導入過程を調査・分析し，その社会的，経済的，政治的意味を明らかにした。

第４に，マヤ系先住民の置かれた社会的，政治的状況について検討し，マヤ系先住民社会の伝統性と近代性を統一的に捉えることによって，その現実を的確に説明し，当該地域の研究の発展に貢献している。

以上のように，本論文は従来手薄であった地域について，新たな観点から実態を明らかにしたものであり，農業経済学，農村社会学，文化人類学等，広く地域研究に資するところが大きい。

よって本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお平成15年１月16日，論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果，博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。